

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」

第二部「伊勢信仰と大国主信仰の神」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

倭（やまと）は高天原と葦原中国を制していた出雲王国と争い、国譲りによつて高天原が治める国になります。

高天原を治めていた天照大神を祀る伊勢神宮、高天原の目に大和を治めていた出雲の大国主命を祀る出雲大社。日本の神社信仰の始まりにある両神社の信仰の由来を探る旅です。

著者：有限会社 情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカー」の田やコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元々としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第二部「伊勢信仰と大国主（出雲）信仰の神」では、天照大御神を祭祀する神道体系の頂点にある「伊勢神宮」の創建の由来と「お伊勢参り」に代表される伊勢信仰の要因を捉えます。また、葦原中国を支配していた出雲大国は大国主命が高天原へ国譲りをする時に、出雲大社を創建してもらいます。両神社の由来と特徴を解き明かしていきます。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- ＋「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」 島田裕巳著（幻冬舎）
- ＋「日本の神社 伊勢神宮（内宮）」（ディアゴスティーニ）
- ＋「日本の神社 伊勢神宮（下宮）」（ディアゴスティーニ）
- ＋「神宮」社巡拝案内（伊勢神宮崇敬会）
- ＋「元伊勢籠神社御由緒略記」（元伊勢籠神社）
- ＋「日本の神社 出雲大社」（ディアゴスティーニ出版）
- ＋「出雲風土記」加藤義成校注（報光社）
- ＋「出雲と大和のあけぼの」 斎木 雲州著（大元出版）

十「熊野大神」(加藤隆久著、戎光祥出版)
十「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
十「古事記」(竹田恒泰著、学研)など
本冊子の古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第二部「伊勢信仰と大国主(出雲)信仰の神」の全体構成は次の
目次に上げておきます。

古代史シリーズ5 「神社と神々」

第二部「伊勢信仰と大国主(出雲)信仰の神」の目次

第一章 「伊勢神宮の神と特性」	5
天照大御神の位置づけと伊勢神宮の特性を全体像で掴みます。	
第二章 「伊勢神宮の由来と広がり」	14
伊勢神宮の創建由来とお伊勢様信仰の背景を掴みます。	
第三章 「大社造りと社殿の神々」	24
大社造りと熊野の神と伊勢の神との位置づけを把握します。	
第四章 「出雲の神々と大社創建」	33
書紀を通しての熊野大社の由来、大国主命とその関係神を把握します。	
第五章 「出雲大社の祭祀」	46
出雲大社の祭祀と熊野大社関係を理解します。	
おわりに	57

◆第一章 「伊勢神宮の神と特性」の目次

第一話 伊勢神宮の全体概要..... 6

第二話 祭祀構造..... 7

第三話 建築様式と社殿配置..... 9

コラム .. 「胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅」..... 12

第一話 伊勢神宮の全体概要

伊勢神宮は神の名前ではなく天皇の祖先である「天照大御神（アマテラスオオミカミ）」を祀る場所を表す。「お伊勢様」で知られる皇室の祖先は「皇祖神」とされ、記紀において正当性を持つて登場する神道（しんとう）の中核の神である。

祭神構成は、天照大御神を祀る「内宮（ないぐう）」、豊受大御神（トウケオオミカミ）を祀る「外宮（げぐう）」からなる（参照資料「一」）。正式名称はそれぞれ「皇大神宮（こうたいじんぐう）」、「豊受大神宮（とうけだいじんぐう）」という。伊勢神宮とは、祭神が坐ます正宮（しょうぐう）の他に別宮（べつぐう）を司る所管社は正宮所

管が三十四社、別宮が八社。正宮を含めて、百二十五社を合わせて伊勢神宮という。

別宮とは、御正宮の『わけみや』という意味で、御正宮について尊いお宮のことをいいます（参照資料「一」）。例えば、伊邪那岐宮、伊邪那美宮などが別宮です。皇大神宮（内宮）に十ヶ所、豊受大神宮（外宮）に四ヶ所の別宮があります。摂社は延喜式神名帳（えんぎしきじ

参照資料1-1:内宮・外宮配置



出典: ウィキペディアから原図引用



参照資料1-2:伊勢神宮別宮14社マップ



出典: ウィキペディア

参照資料1-3:伊勢神宮別宮14社

内:内宮境内、月:月読宮、瀧:滝宮境内、別:別場所

	N o	別宮名	祭神	場 所	祭神概説
内 宮	3	荒祭宮(あらまつりのみや)	天照大御神荒魂	内	天照大御神の荒魂を祀る10別宮で最大の別宮
	5	月読宮(つきよみのみや)	月読尊	月	天照大御神の弟神。月の満ち欠けを教え暦を司る神
	6	月読荒魂宮	月読尊の荒御魂	月	月読尊の荒御魂を祀る
	7	伊佐奈岐宮	伊弉諾尊	月	天照大御神の御父神
	8	伊佐奈弥宮	伊弉冉尊	月	天照大御神の御母神
	—	瀧原宮	天照大御神御魂(和魂)	瀧	皇大神宮の遙宮(とおのみや)と称され最初の宮
	—	瀧原竝宮(ならびのみや)	天照大御神御魂(荒魂)	瀧	瀧原宮と二宮並んで奉斎されている
	—	伊雑宮(いざわみや)	天照大御神御魂	別	磯部(いそべ)の大神宮さんと呼ばれ、志摩一円の漁業関係者の信仰があつた。特に漁師や海女さんは「磯守(海幸木守)」を受け、身につけて海に入るのが風習となっている。
	1 2	風日祈宮(かざひのみのみや)	級長津彦命(しなつひこのみこと)、級長戸辺命(しなとべのみこと)	内	風の神。農作物の成長に風雨の災害のないようお祈りする「風日祈の神事」に由来。元寇撃退となった、伊勢の神風の話が伝えられている
	1 3	倭姫宮	倭姫命(やまとひめ)	別	天照大御神の御杖代(みつえしろ)となつて、皇大神宮ご創建のご功績。
外 宮	4	多賀宮(たかのみや)	豊受大御神荒御魂	外	豊受大御神の荒御魂。外宮の四別宮のうち、第一位
	1 4	土宮	大土乃御祖神(おおつちのみおやのかみ)	外	古くから山田原やまだのはらの鎮守の神でしたが、外宮の鎮座以後は宮域の地主神、宮川堤防の守護神
	—	月夜見宮(つきよみのみこと)	月夜見尊 月夜見尊荒御魂	別	月読宮のご祭神と同じ。月夜見尊と月夜見尊荒御魂を一つの社殿に合わせてお祀り
	1 6	風宮	級長津彦命/級長戸辺命	外	内宮別宮の風日祈宮のご祭神と同じ

出典:日本の神社「伊勢神宮(内宮、外宮)デアゴスティーニ、

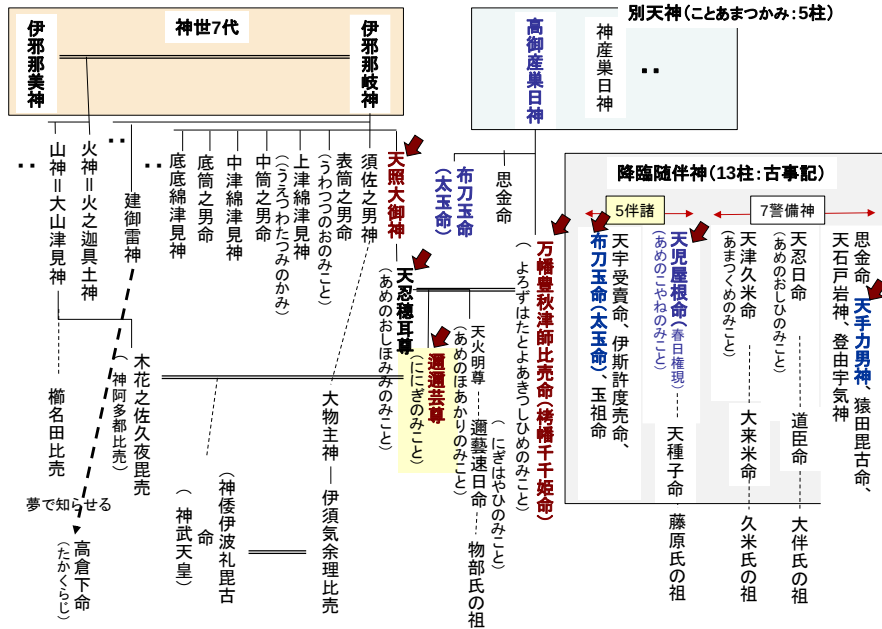
第二話 祭祀構造

内宮は天照大御神を祭る。神仏習合時には、天照大御神の本地仏は大日如来(金剛界大日如来)とされた。ご神体は八咫鏡(ヤタノカガミ)、相殿(あいどの)は、天手力男神(マメノタジカラオノカミ)、ご神体は「弓」。栲幡千千姫命(タクハタチヂヒメノミコト)、ご神体は「剣」である。天手力男神は天の岩戸を引き開けた手のあまりある力の神で、瓊瓊杵尊(ニギノミコト)の随伴神として天孫降臨する神である。天照大御神の守護神で相殿に鎮座する。栲幡千千姫命の「栲(たく)」は、衣を作る際の繊維となり、「幡(はた)」は繊維を織る機械のことを意味しており、すなわち、「織物の神様」を表している。衣食住の「衣」を受け持つ神である。

んみようちよう)に記述され、末社は本宮の由来を記す延暦儀式帳(えんりやくぎしきちよう)にその由来に關わり記述されている神社です。所管社は正宮や別宮に直接關わり合いがあり、水や酒、米、塩、絹、麻など衣食住を司る神々が多く祭られています。

伊勢以外で天照大御神を祀る神社は、神明社、神明宮、皇大神宮などと呼ばれる。代表的な神明社は、芝大神宮、石川の金沢神明宮、長野の仁科神明宮、京都の日向(ひむかい)神明宮(日向大神宮)などがあります。

参照資料1-4:伊勢神宮(内宮、外宮)正宮の關係神系図



天照大御神の子である天之忍穗耳尊(アメノオシホミミノミコト)の后になる神である。栲幡千千姫命は瓊瓊杵尊を生み、天孫降臨へとつながる(参照資料1-4)。

出典:『海道東征』をゆく(産経新聞社)、『古事記』(竹田恒泰著、学研)

外宮は豊受大御神(トヨウケオオミカミ)を祭る。本地仏は胎藏界(たいざうかい)大日如来とされた。ご神体は「鏡」、相殿は、天児屋根命(アメノコヤネノミコト)、ご神体は「笏(しやく)」。太玉命(フトダマノミコト)、ご神体は「宝玉(勾玉)」、邇邇芸尊(ニギノミコト)、ご神体は「鏡」である。(注:密教曼荼羅に関してはコラムを参照してください。天児屋根命は天岩戸伝承で祝詞(のりと)を奏上した祝詞の神、太玉命は天岩戸伝承で鏡を天照に捧げた祭祀の神、邇邇芸尊は天孫降臨により高千穂の峯に降臨され、孫のイワレビコ尊が神武東征によって初代天皇、神武天皇となる。内宮の中心にある心御柱(しんのみはしら)が内宮・外宮の御正殿で天照大御神のご神体の床の真下に埋められている。由来は、「天皇を象徴するもの、天皇を守護し、天皇に国を守護してもらおう」ということである。又、神籬(ひもろぎ)説もあるが、「御正殿の位置を明確にするもの」というのが有力視されている。

斎宮(いつきのみや)は内親王や女王といった皇室に連なる女性が選ばれ、潔斎を行しながら神事の奉仕をする。内親王とは嫡出(ちやくしゅつ)の皇女および嫡男系嫡出の皇孫(天皇の子孫)である女子をいう。

天武天皇時、斎宮制度(さいぐうせいど)が正式に設けられるが、それまでも斎王は天照大御神の御杖代(みつえしろ)神の意を受ける依り代)として奉斎(ほうさい)身(み)を清めて神仏を祀(まつ)ることした。天武天皇が始めた斎宮制度は息女の大来皇女(オオクメノヒメノミコ)から始まる。

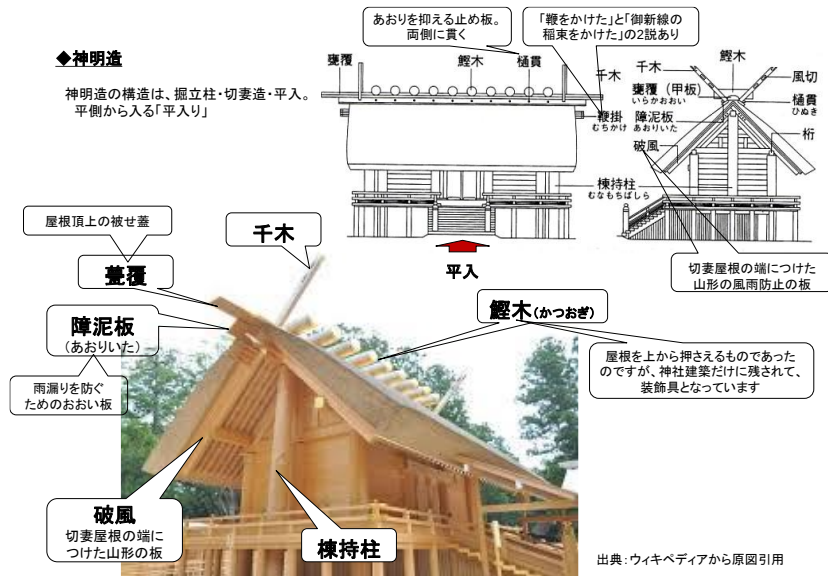
第三話 建築様式と社殿配置

伊勢神宮の正殿は神明づくりという伊勢神宮独特の建築様式を持つ(参照資料1-5)。屋根の千木(ちぎ)と鯉木(かつおぎ)を

持つ神社は出雲大社、伊勢神宮、住吉大社、春日大社とその系列になる。記紀に掲げる中核の神を持つ神社である。外削ぎの千木を男系神、内削ぎ千木は女性神を祭る社とされる。伊勢神宮では、内宮は天照大御神を祭るので内削ぎですが、外宮は豊受大御神で記紀には女性神と書かれてますが、外削ぎです。何か由来があると思われます。

出典: ウィキペディアから原図引用

参照資料1-5: 神明づくり

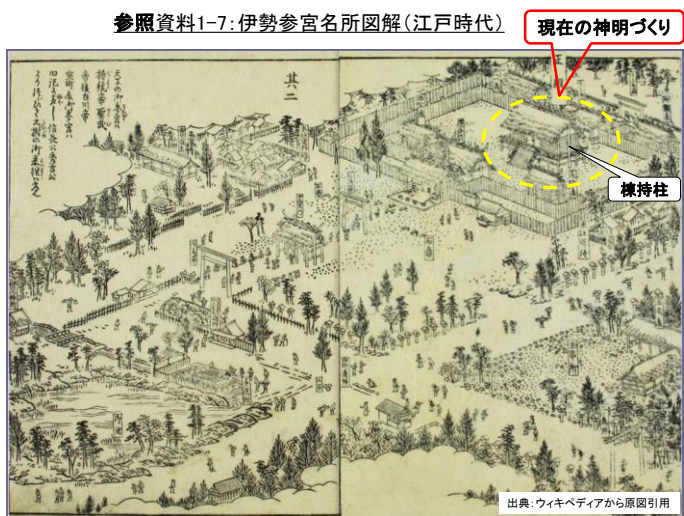
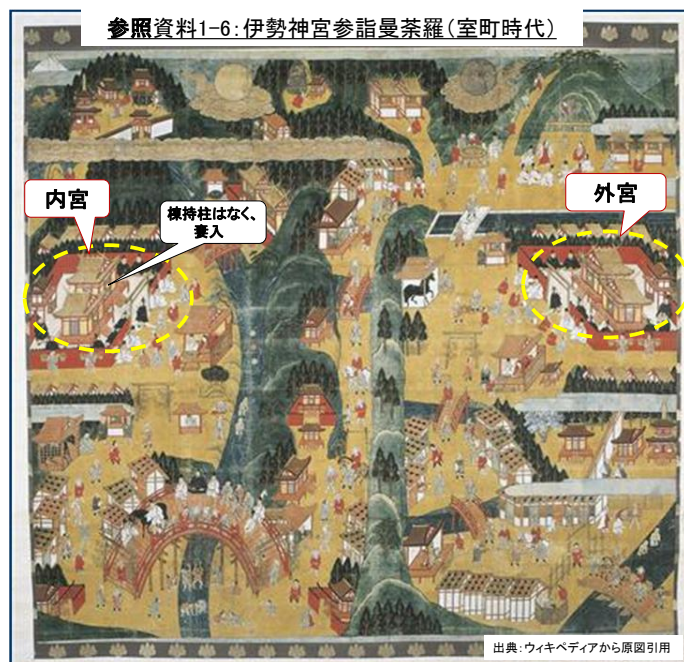


千木は出雲大社にもあり、それを踏襲している。ちなみに千木を持つ神社は出雲大社、伊勢神宮、住吉大社、春日大社とその系列になる。記紀に掲げる中核の神を持つ神社である。外削ぎの千木を男系神、内削ぎ千木は女性神を祭る社とされる。伊勢神宮では、内宮は天照大御神を祭るので内削ぎですが、外宮は豊受大御神で記紀には女性神と書かれてますが、外削ぎです。何か由来があると思われます。

鯉木(かつおぎ)は、もともとは屋根を上から押さえるものであったのですが、神社建築だけに残されて、装飾具となっています。千木と鯉木は一体で使用されています。内宮は十本、外宮は九本の鯉木です。ちなみに、大社造りの鯉木は三本です。

他に社殿の屋根に係る細工に屋根頂上の被せ蓋(かぶせぶた)である葺(いらかおおい)、雨漏りを防ぐための覆い板である障泥板(あおりいた)、切妻屋根の端につけた山形の風雨防止の板で破風(はかり)がある。

神殿への入口は平入である。平入りとは屋根の流れ方向を平と言、平側から建物に入る形式を平入りと言う。すなわち棟(大棟)と平行な面に入出口のある形式である。ちなみに、出雲大社は妻入りである。



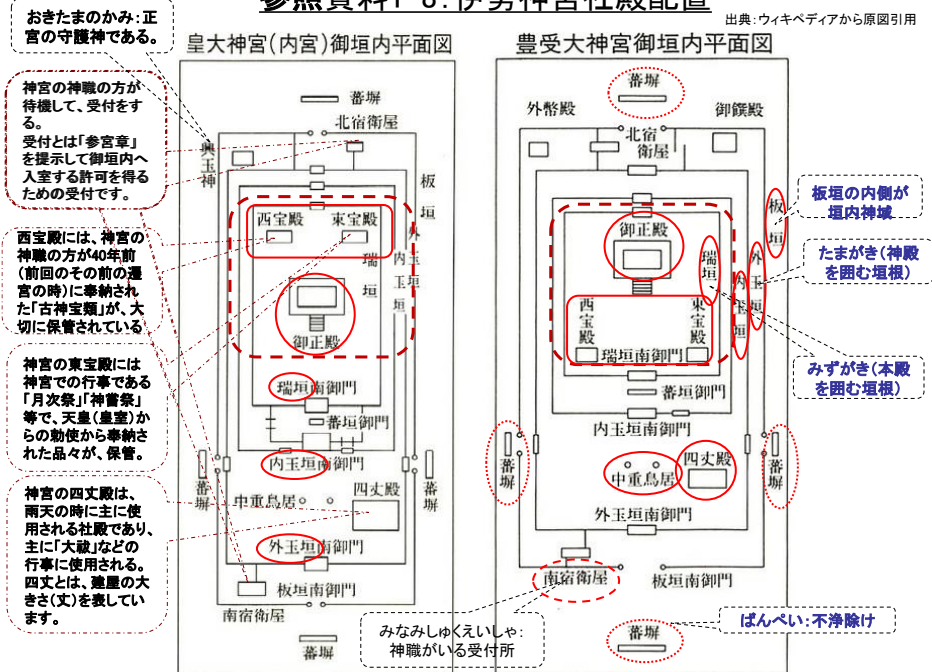
建築物の支えである棟持柱(むねもちばしら)は掘立柱であり、棟の南北で本殿を支える大黒柱になっている。掘立柱とは直接土に埋め込んだ柱である。大社造でも掘立柱を基本とする。九つの柱があり本殿を支えるが、中央の三本の柱は中央にある心御柱(しんのみはしら)を宇頭柱(うずばしら)が両側からはさみ大黒柱とする。明らかに大社造の方が耐久性が優れている。出雲大社の大社造は「大国主信仰」で詳述する。

「伊勢両宮曼荼羅」によれば、現在の神明造りの様式は西暦千六百年以降に出来上がったことが分かります。それは、参照資料1-6の室町時代の伊勢参詣曼荼羅には棟持柱が見えないし、妻入りになっており、大社造に倣っているように見える。江戸時代の伊勢参宮名所図解(図表1-7)には棟持柱が見える。つまり、神明造の建築様式は江戸時代になって作られたことが判明する。次に伊勢神宮の社殿構成を見てみよう。

内宮、外宮共に社殿配置は基本的に同じであるが、大きな差は、瑞垣(みずがき)内の御正殿と宝殿の配置が逆になることである(参照資料1-8)。(千木も内宮が内削ぎで、外宮が外削ぎである。両宮の祭神は対称形で相対同等の神として位置付

参照資料1-8:伊勢神宮社殿配置

出典: ウィキペディアから原図引用



けているのは興味深い。

参照資料1-8を用いて内宮を中心に垣内と社殿配置を解説しましょう。御正殿は四つの垣根で護られている。一番外側から板垣(いたがき)、外玉垣(そとたまがき)、内玉垣、瑞垣(みずがき)である。板垣の内側が垣内神域になる。「不浄除け」として蕃塀(ばんべい)が東西南北に配置される。この門を入ると外玉垣である。この内側が神域となる。南北の外玉垣門には宿衛屋(しゅくえいしや)を配置し、神職による入門の監視と受付がなされる。

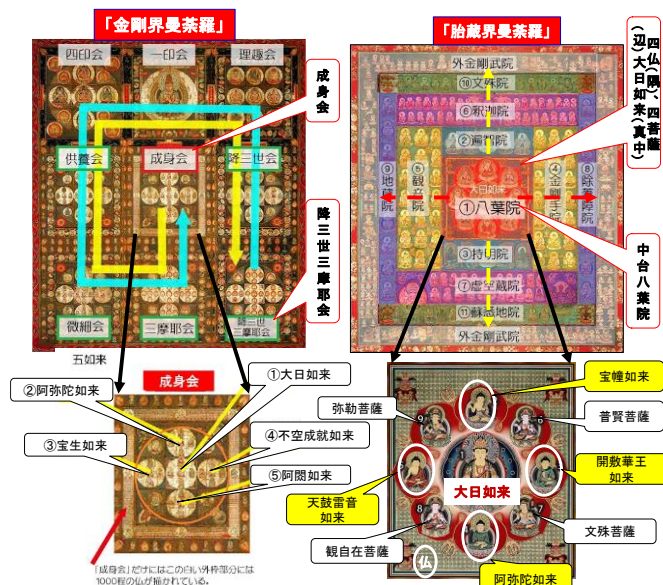
外玉垣を入ると、玉垣内になり、神様の魂(たましい)がおります所から玉垣になる。伊勢神宮では中重鳥居(なかおろし)のえのとりいと四丈殿(しじょうでん)がある。神宮の四丈殿は、雨天の時に主に使用される社殿であり、主に「大祓(おおはらえ)」などの行事に使用される。四丈とは、建屋の大きさ(丈)を表しています。一丈とは十尺のことをいいます。中重鳥居を過ぎ内玉垣門を入ると、瑞垣門(みずがきもん)があり、瑞垣門内が神域である。御正殿と東西宝殿がある。西宝殿には、神宮の神職の方が四十年前(前回のその前の遷宮の時)に奉納された「古神宝類」が、大切に保管されている。神宮の東宝殿には神宮での行事である「月次祭」「神嘗祭(にいなめさい)」等で、天皇(皇室)からの勅使から奉納された品々が、保管されている。御正殿には、天照大御神(アマテラスオオミカミ)、相殿神として天手力男神(アメノテヂカラオノカミ)、万幡豊秋津姫命(ヨロズハタトヨアキツヒメノミコト)を祭る。

コラム：「胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅」

弘法大師・空海は国唐代の密教の高僧である恵果(けいか)に師事し、真言密教の奥義(おうぎ)を伝授され日本に持ち帰る。そして、空海はその密教を絵解きし曼荼羅に表した。曼荼羅は悟りの境地を絵柄で示したものになっており、代表的なものには大日経を示した「胎藏界曼荼羅(たいざうかいまんだら)」と金剛頂経(こんごうちょうぎょう)を示した「金剛界曼荼羅(こんごうかいまんだら)」があります。

参照資料1-9:胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅

出典：仏教美術館



成身会(成身會)は、大日如来を中心とした、胎藏界の仏の配置されている。成身会(成身會)は、大日如来を中心とした、胎藏界の仏の配置されている。成身会(成身會)は、大日如来を中心とした、胎藏界の仏の配置されている。

「智慧」とは真理を明らかにし悟りをひらく働きのことを云います。金剛とは、如来が悟った智は堅固で一切の煩惱を打ち砕く程の力があるという意味で「金剛」とつけられています。「金剛界曼荼羅」は、中央の「成身会(じょうじんね)」から始まり右回りに進み最後「降三世三摩耶会」まで展開して見ることが出来ます。成身会は密教の教えを仏様で表したといわれます。大日如来を中心に大日如来・上(西)の阿弥陀如来・下(東)の阿閼(あしゆく)如来がそれぞれ胎藏界の仏部・蓮華部・金剛部を示し、向かって左(南)の宝生(ほうしゅう)如来を宝部、右(北)の不空成就(ぶくうじょうじゆ)如来が配置されている。

れる情報をもとに、現実生活を悟りに向かうべく成就させてゆく智慧の仏です。大日如来さまは永遠普遍、自性清浄なる大日如来の絶対智であり、他の四智を統合する智慧である。この五智五仏で密教の世界を表現した。この心理を明らかにする智慧で人々を救済する方法と悟りへの道を表しています。

金剛曼荼羅図の右回りの黄色線、これは人々を救済する方法の順序をこの曼荼羅で表現しています。反対に降三世三昧耶会から左回りに回ると（金剛曼荼羅図青色線）これは人々が密教を学ぶ順序を表現していると云われています。大日如来がどのように変身して私たちを救うかを表していることになります。端を入り口として中央の大日如来に近づいていくイメージです。現実世界を貫いている普遍的な理法です。

「胎藏界曼荼羅」は大日如来がどのように変身（対応）して私たちを救うかを表している。「胎藏曼荼羅」に描かれている諸尊は、それぞれの存在の意義を発揮しながら、相互供養し、大日如来のこの世の全ての生命を生かす大いなる生命ならびに慈悲や智慧を分担し、衆生を救済し、悟りの世界が得られるよう衆生を導いている働きのさまを表しています。つまり、大日如来の真理を役割分担した四百十四の仏で表した理の世界の象徴である。上記絵のように十二の「院」に分かれています。これらの院は中心の中台八葉院から上下左右に展開していることを示しています。例えば、中台八葉院においても、大日如来を囲む四仏、四菩薩はそれぞれの役割に分解されます。

「四仏」を見ると、宝幢如来（仏性に目覚め）↓開敷華王如来（修行）↓阿弥陀如来（悟り）↓天鼓雷音如来（涅槃）となり、仏を手伝う「四菩薩」を見ると、普賢菩薩（菩提心）↓文殊菩薩（知恵）↓観自在菩薩（慈悲）↓弥勒菩薩（未来）というように役割分担をされています。この大日如来の心理を表す中台八葉院の役割が衆生（人々）へ役割を以て分解され、繋げた図になっているわけです。大日如来が変身されて、如来の心理と現実世界の普遍的理法をつないで悟りの道を智の体系として作り上げているのです。